第三分科会

館林ユネスコ協会　荘司由利恵

第三分科会は「異文化理解・国際交流」を主題に掲げ、二つのユ協より発表がありました。一番目は、【「カンボジアに映画館をつくろう」ユネスコの青年活動の新しい潮流　渋谷ユネスコの青年活動に見るこれからの青年との大人の関係づくり】発表者は渋谷ユネスコ協会の石川幸佑氏。二番目は【「国際理解・国際交流を進めるユネスコ活動のあり方」大泉ユネスコ協会での取り組む活動を通して】発表者は大泉ユネスコ協会の清水善義氏。

「カンボジアに映画館をつくろう」の発表を聞き、いかにカンボジアの現状を知らなかったかカルチャーショックを受ける。国土面積は日本の約半分、人口は約1、500万人、とくに平均年齢は25歳程度、そして電化率は17・2％と聞いた時には、日本との違いを知らされた。この国に何故映画館をつくろうとするのか。「生まれ育った環境に関係なく、子どもたちが夢を持ち自分の人生を切り拓ける世界をつくる」ということを掲げて活動をしている団体と渋谷ユ協との協力のもと現地の方々と、日本の若者のボランティアによって運営されている。ここで我々が学ぶことは、「若者との関係づくり」そして、若者が「何をしたいのか」「応援してほしい」という青年に出会い、まず応援してみることが始まりである。これまではユネスコの青年活動はユネスコの会員のみで行われてきたが、会員外の青年を応援することから協力し続ける関係が構築されることを教わった。

次に「国際理解・国際交流を進めるユネスコ活動のあり方」の発表では、私の住んでいるお隣の大泉町では、このような素晴らしい活動をしているのかと驚きが一番。大泉町の外国人在住者は、町の総人口40、753人で、外国人は48カ国六千人を超え、住民比率は14・8％の中で町として異文化理解、外国人との共生を課題として取り組んでいる。ESD推進における大泉ユ協として「共に生きる」ための学習を進めている。各種活動を通して、町内の学生生徒たちの国際感覚を磨き、国際理解を深め、現在また将来に向けての「生きる力・共に生きる力」を育てている。世代間交流では相互理解や異文化への気づきを促進し、「つながり」を意識尊重する場になっていることを学ぶ。

二つの事例発表を通して、各々所属する関東ブロックの各ユ協が目指す方向を見つけられる、実り多い研究会でした。

第四分科会　ユネスコ活動の運営・活性化

高崎ユネスコ協会　田中けい子

第四分科会のテーマはユネスコ活動の運営と活性化だった。最初の提案者は草加ユ協土澤明会長で、二〇〇五年発足時に比べ会員が減少し、現在十三名で運営し高齢化も進んでいる。活動内容は絵画展・国際フェスティバルや祭りへの参加・会報の発行等協力して行っているが継続していけるのか心配し、行政や市民の協力を得られないという提案だった。

その後の話し合いでは①ユネスコに関する法律というのがあるので、行政にこれを示しさらなる協力を求める。②各ユ協の工夫した活動の取り組みを県や日ユ協が行政に紹介することを期待したい。③会員の減少や高齢化は他のユ協も課題だが、原点に返って活動の工夫を行う。以上三点が主な協議内容だった。

次に太田ユ協の佐藤工祐青年部長からは英語キャンプの運営体制について青年部の活動の成果や課題が提案された。太田ユ協は三四〇名の会員がおり市長を始め行政職、医師会、校園長会等のバックアップが得られている。英語キャンプは二泊三日で七十名の中学生を募り、英語習得・国際人を育てる。世界の平和に貢献できる人材の育成を目的に実施している。ALTを講師にサポートしてくれる人材も募って大がかりに行うが、参加した生徒も三日間のうちに変わるし、サポートした大人たちも生徒への支援や互いの交流を通して社会貢献の満足感も得てくる。ただ二十代から四十代の若い人達がこの事業に関わっているので継続の難しさや急な不参加等もあり、年間を通してユネスコの活動に参加してもらえるよう内容等工夫することが課題である。

話し合いでは青年部の積極的な活動を称える発言があったが、杉並ユ協の同じく青年部の年間を通した取り組みの紹介があった。各ユ協とも青年部の活動の内容について参考となる話し合いだった。

結びとして沼田ユ協小林コーディネーターが、人口減が予測できユネスコのように平和を唱える団体も消えゆく運命になるかもしれない。若者や人々にユネスコの意義を伝え、平和な社会の実現を目指してユネスコ活動を継続させることが、持続可能な社会の創造と実現に繋がると訴えた。